七福神

本会会長　原田博二

七福神は、夷、大黒天、毘沙門天、弁才天、福禄寿、寿老人、布袋の７つの神様であるが、本稿では、字数に限りがあるので、大黒天、恵比須、弁才天、寿老人の四福神に限って記述する。

大黒天は、本来はインドのヒンドゥー教のマーハカーラという戦いの神様であったが、わが国では童謡に「大きな袋を肩にかけ」とあるように、神話の大国主命、この「おおくに」が「だいこく」に通じるところから、大国主命が大黒天とされた。

ところで大黒天が担いでいる袋には、宝物がどっさり入っており、右手に持つ打ち出の小槌からは、どんな宝物も好きなままに出すことができるという、とても有難い神様である。

ところが大黒天の頭の大きな頭巾、これは「上を見るな、見てもキリがないよ」ということ、足に踏んでいる米俵２俵は、この２俵で満足しなさいと、ともに「謙虚でありなさい」と日頃の生活の無駄、贅沢を戒めているのである。

夷は、イザナギノミコトとイザナミノミコトの間に生まれた夷三郎であるが、風折烏帽子に狩衣・指貫を着て、右手に釣竿を持ち、左手に大きな鯛を抱えているが、これは魚を捕るにも網などは使わず、１尾１尾丁寧に釣り上げること、これが「暴利を貪らない」ということで、現在でも「商売繁盛の神様」として多くの信仰を集めているわけである。

ところで長崎の恵比須町と大黒町は、最初は恵比須町だけであったが、寛文１２年(１６７２)恵比須町を二町に分割、新しくできた町に町名をつけることになった。そこで恵比須・大黒とペアであることから迷わず大黒町と命名されたという。

弁才天は、七福神のなかでは唯一女性の神様である。現在でも「弁天様」といえば、美人の代名詞である。

弁才天は、もともとインドのヒンドゥー教の神様で、インドでガンジス川と並び称されたサラスバアティー川の化身であった。

そこで弁才天は、水を司る神様だけに川の流れる、せせらぎの音から音楽の神様とされた。

わが国でも「べんざい天」の「ざい」を才能の「才」と書く場合は、音楽、さらには芸術の神様とされた。

これに対して水が大いなる収穫をもたらすことから「財宝の神様」ともされたので、この場合は「べんざい天」の「ざい」は財宝の「財」と書き、区別した。

また弁才天は、わが国では市杵島姫命という女神で、漁業の神様ともされ、全国各地に祀られているが、神奈川県の江ノ島、滋賀県の竹生島、広島県の宮島は、「日本三弁天」と呼ばれている。

長崎でも、現在の渕神社は、江戸時代、万福寺という真言宗の寺院であったが、弁才天が祀られ、稲佐の弁天様と呼ばれ、多くの人々に信仰された。

渡辺秀石筆鶴寿老人図（長崎歴史文化博物館収蔵）

福禄寿も寿老人も、ともに中国の道教の神様で、人の寿命を司る神様であるが、福禄寿は、中国では頭の長い老人とされた。

ところがわが国では寿老人も頭の長い老人とされているので、わが国では福禄寿と寿老人を混同しているようである。

ところで寿老人は、南極老人星という星の化身とされている。この南極老人星は、竜骨座という星座の１等星カノープスのことである。

中国ではこの南極老人星は、世の中が平和な時にのみ現れ、これをひと目でも見れば元気で長生きできると信じられていた。

実際、このカノープスは、地平線すれすれに位置するためわが国では普段でもなかなか見ることはできないようである。

ところで寿老人は、中国の北宋時代にその姿を現したといわれている。

時の皇帝は、寿老人が大酒呑みと聞き、１石（１．８リットルの酒瓶で１００本）を用意したが、寿老人は、これをなんと７斗（７０本）も飲み干し、上機嫌で帰ったという。さすがにその夜は酔ったためであろうか、夜空に輝くその位置がいつもより少しズレていたということである。

本稿は、令和６年１月例会での発表要旨である。